

〈翻訳〉

メランヒトン『神学要覧』(1559年) — その2 —  
(Loci praecipui theologici. 1559) 翻訳  
—メランヒトン邦訳ノート (9) —

菱刈 晃夫

前回に引き続き、今回は「罪について」の試訳を掲載する。

\* \* \*

罪について  
(SA Bd.1.280-307.)

たとえ、もしすべての民族が、恐ろしい混乱、悪徳、そして人類の最も悲惨な災難を見て、さらに罪の重荷を感じるにしても、それにもかかわらず教会だけが、罪がどこに由来し、それが何であるかを教えてくれます。そして、聖なる怒りと〔神の〕現前ならびに永遠の罰に関する神の言葉を聞くのです。さらに人間の知恵は道徳を導き、理性に反する行いを不可とし罰していますが、それにもかかわらず、罪について考察するなかで固有のものが何かを知りません。すなわち、神の前あるいは神の怒りの前における罪〔の告発〕のことを。アレクサンダーはクレイトスを殺害したとき、卑劣なことをしてしまったと自分で思い、自然の判断に反するを行ったために嘆き悲しみましたが<sup>(1)</sup>、しかし、神に対して過ちを犯したがゆえに嘆き悲しむことはなく、神の前において自らが犯罪人であるがゆえに嘆き悲しむこともありませんでした。しかし、教会は神の怒りを示し、人間の理性が見なすよりも、罪がはるかに大きな悪であることを教えるのです。教会は、哲学のように、神の法もしくはは理性と争うような、ただの外的な行いについて咎めるだけではありません。根本と果実、精神の内的な暗闇、神の意志についての疑い、神からの人間の意志の離反、そして神の法に反して人間の心が強情であること〔命令不服従〕を咎めるのです。神の子に対する無知と軽蔑も咎めます。これは悲しむべき恐るべき悪であり、その大きさについては語るのも困

難です。したがって、キリストはいいました。「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである」<sup>(2)</sup>。

これは政体の判断〔市民的判断〕からは全く異質の訴えです。したがって、この世は聖霊によって、福音の声によって咎められるといい、人間そして市民による判断によるのではない、ということです。そして、次の罪についても咎められます。すなわち、神の子を軽蔑することです。というのも、人間は福音とキリストの恩恵を拒絶し、神の子への信頼によって神へと近づくのではなく、絶え間ない疑いに止まり、神から遠ざかるか、あるいは恐ろしい無謀によって、偶像礼拝を捏造するからです。

次に、こういわれます。「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」<sup>(3)</sup>。というのも、賢者たちは正しさ〔義〕というものを、どのようなものであれ普遍的な規律 (*disciplina*) あるいは服従 (*obedientia*) であると見なすからです。ちょうど、法に従って、というのと同じです。しかし、はるかに異なる正しさを福音は知らせます。というのも、そうした人間の規律は、罪も死も取り除くことはなく、それができるのは神の前における正しさだからです。これは、神がわたしたちを義人であり、受け入れられた者であり、永遠の命の相続者であると見なしてくれるものであり、罪と死とを滅ぼすものです。こういわれているように。「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」<sup>(4)</sup>。つまり、わたしがあなたのために贈られたこと、犠牲になったこと、そして王国〔父のもと〕に行くこととは、こうしたことによってあなたのために〔神の子キリストが〕永遠の仲介者となり、あなた方を聖別し、永遠の命に向けて蘇らせ、罪と死とを取り除いてくれる、ということの意味しているのです。このように父のもとに行くこと、およびキリストの王国が、わたしたちを義〔神の前で真に正しいもの〕としてくれるのです。

第三に、こう付け加えられます。裁きについて。この世は常にこの教えに対して激しい論争を行っていますし、また行ってきました。そして、神の子を断罪し、また断罪してきました。さらに、悪魔は自身の道具を冒瀆的な判断や残酷さへ向けて駆り立てています。ちょうど異教徒たちがやるように、冒瀆やいつの時代にも見られる冷酷さが示している通りです。しかし、こうした悪魔による狂乱した振舞いが教会を滅ぼすことは

ありません。というのも、不敬虔な判断に反対するよう、常に聖霊が教会を強固なものにしてくれているからであり、悪魔は断罪されているがゆえに、ついに教会は勝利することになるからです。こうして神は悪魔の判断と狂乱した振舞いとを破滅に追いやるのです。

したがって、聖霊が福音に仕える声によってこの世を咎め、罪がどこに由来し、それが何であるか、さらにどれほどの悪であるかを示すとき、聖霊は、次のように教えていることを知らなければなりません。それは、もし罪とは何であるかが知られなければ、キリストによる恩恵は理解されない、ということです。それどころか、まさにこうした理由によって、神は福音に仕える声〔聖霊〕とひどい災難とによって教会をして、わたしたたちに、罪への神の怒りを認識し、仲介者となる子に救いを求めるように、駆り立てるのです。キリストは教会における教えのすべてを、次のようにまとめています。「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」<sup>(5)</sup>。さらに、罪の認識が含まれます。つまり、罪に対する神の怒りを認識することで生じてくる恐怖のことで、そこで、パウロはローマの信徒への手紙のなかで、とくにこれについて述べています。彼は三つのポイントを明らかにしています。すなわち、罪とは何であるか、律法は何をもたらすか、キリストの恩恵とはどのようなものであり何をもたらすか。したがって、わたしたちは、こうしたポイントとなる教えを、明白に、純粹に、明瞭に教会のなかで目立つようにしなければならない、ということを知るのです。

しかし、教えるに当たっては定義から始めるのが通例です。それゆえに、罪の定義がはじめに示されなければなりません。しかし、ロンバルドゥスのなかで問題を展開する作家たちは、ひとつも共通の定義を残していないように見えます。つまり、原罪と現実の罪にふさわしい定義です。ことによると、彼らは共通の定義を残すことは不可能だと思っていたのかもしれませんが。というのも、現実の罪はわたしたちの行為のゆえにこれを被告人にするからです。それに対して、原罪はあるときは他人の過失により、あるときはわたしたちとともに生れついた、わたしたちの汚れによって被告人とするからです。

その後、彼らはこのように想像するのです。神の律法は現実の罪だけを断罪する、と。これはローマの信徒への手紙7章から、間違いであることが明らかです。

わたしたちにとって罪とは何か、聖書の意味は明らかです。罪は、もともとある種の犯罪であり、もし赦しがないならば、神によって断罪されるものを意味しています。この

一般的な記述は、原罪と現実の罪とに合致します。しかし、ただ関係、つまり被告人のそれとの関係に言及しますので、精神はさらに、なにゆえに人間は被告人なのか、探究するのです。したがって、この定義をわたしは用い、さらに教会では、多くの教師や敬虔な人々の判断とともに秩序づけられて、こうしたものが存在することを望みます。すなわち、罪とは無力 (*defectus*)、あるいは傾向 (*inclinatio*)、あるいは神の律法との現実の争い (*action pugnans*) です。神を怒らせ、神によって断罪され、犯罪者を永遠の怒りにもたらし、永遠の罰にさらすものです。もし、赦しがなければ。こうした定義において、無力と傾向といったいい方は、根源悪 (*malum originis*) [原罪] と一致しています。現実の行為 (*actio*) とは、内的にも外的にも実際に生じてあるすべてのものを表しています。

共通する相異は、どちらも神の律法と相争うということです。というのも、神の律法は、敵対するといったような現実の行為についてだけではなく、人間の本性にある暗闇 (*tenebrae*)、無力、そして墮落した傾向さえも断罪するからです。ちょうどローマの信徒への手紙7章で、パウロがとても鋭く主張したように。

次いで、特別な言葉が付加されます。神による断罪、神を害する、被告人に怒りと罰とを与えるなど。こうした特有の意味を、教会はとくに教え込みます。というのも、理性は神の律法に反する悪徳が存在することを理解しますが、しかし、その後の神の怒りを蔑ろにするからです。したがって、神によって被告人となり断罪されるといったことが理解され、それがわたしたちにわかるように、罪について触れられるたびに、この特有の意味はとくに考慮されなければならないのです。

しかし、この定義は次の言葉から主張されなければなりません。律法の書に書かれているすべての事を絶えず守らない者は皆、呪われている<sup>(6)</sup>。罪は神によって罵られる不服従 (*inobedientia*) だと定義しています。そして、不服従はただ現実のものだけではなく、普遍的なものであり、それは神に相反する人間の本性にある、と理解されています。さらに、恐るべきことが付加されなければなりません。神による罵りは、つまり、怒らされた神は、そうした者を退け、その前に被造物を恐ろしい罰へと投げ捨てる、といわれていることを。

さらに、この定義とパウロのローマの信徒への手紙1章の言葉は一致します。「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます」<sup>(7)</sup> など。そして、7章でパウロはいいます。「罪は限りなく邪悪なもので

あることが、掟を通して示されたのでした」<sup>(8)</sup>。つまり、律法は神の怒りを示します。その認識を通じて、わたしたちの汚れは脆弱な悪ではなく、むしろある種の版材であり、神によって断罪され、非難されるべきものであることを、わたしたちは理解するのです。それには、恐るべき罰が続きます。ゆえに、罪について言及されるたびに、教会においてこの名称は哲学者による悪徳という名称とは区別されます。というのも、教会は神による裁きと怒りについて宣言するからです。

もし、だれかが原罪を、わたしたちの内にある邪悪を抜きにして、アダムの墮落による罪であるとだけ見なすのなら、それは誤りです。しかし、もしわたしたちは罪人に生まれついていて、アダムの墮落およびわたしたちに生まれつきある邪悪によってある、と主張する者がいるなら、わたしはそれに次のようなより細かい定義を付加するのを妨げはしません。つまり、罪とはアダムの墮落によるものであり、あるときには神の律法に逆らう無力であり、あるいは傾向であり、あるいは行為である等々、と。しかし、わたしは最微に至るまでこれを磨こうとは思いません。アダムの墮落によって、その子孫には、自然の元のままなら輝いていたであろう、かの光も、真っ直ぐな意志と心も失われてしまったことは明らかなのです。こうした生まれつきの悪のゆえに、わたしたちが罪人〔被告人〕(reus)であることは、疑問の余地もありません。

さて、一般的な罪の定義については定められましたので、次に個別の罪、原罪および現実の罪について述べることにしましょう。ここでわたしたちは、言葉についての争い(λογομαχία)や言葉の詮索をするのではなく、預言者や使徒の書および先人の書いたものに確かに伝えられている証言のなかに、必要なことがらをしっかりと保つことにしましょう。もし、だれかがこれをよりふさわしく説明しているのなら、わたしたちは喜んでその話を用いることにしましょう。というのも、わたしたちは言葉に関して争うのではなく、必要なことがらを語るからです。わたしにとっては、アンセルムスの記述が保持されるのは不快ではありません。

## 原罪について

原罪(peccatum originis)とは、わたしたちの内になければならない元々の正しさが欠けていることです。しかし、この短くて曖昧な記述には、より長い説明が必要です。というのも、元々の正しさ〔原義〕(iustitia originalis)とは何を意味しているのかが、

探究されねばならないからです。したがって、次の説明が付加されねばなりません。原義とは神の前で人類が受け容れられていることでした。そして、人間の本性そのものにおいて、精神には光があり、それによって神の言葉としっかり賛同することができたのでした。さらに、意志は神へと回転し、心は、人間の精神に植え付けられている神の律法による判断と一致し、これに従っていたのです。

ここにすべて含まれているのが原義であり、それは次の言説から理解されます。人間は神の像および似像に向けて作られた。このことはパウロが説明していて、神の像とは、精神が神を認識する〔機能の〕ことであり、自由で正しい意志とは、神の律法と一致することである、と。エフェソの信徒への手紙4章でいわれているように。「神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません」<sup>(9)</sup>。真の敬虔〔清さ〕を彼は徳のすべてであるといい、それはまさに心が次の目的に向けられているということです。つまり、神への服従が果たされ、神が愛され、賛美されるという目的です。したがって、原義が何を意味しているかが確立された後、次いでとにかくその反対の欠如とは何かが、説明できるようになるのです。

原罪とは原義が欠けていること (*caerentia iustitiae originalis*) です。つまり、男の種から生まれたものにおいては、精神に光が失われていて (*amissio lucis*)、神から意志は離反し (*aversio voluntatis*)、心は頑な (*contumacia cordis*) であり、神の律法に真に従うことはできません。アダムの墮落 (*lapsus Adae*) に続いて、その腐敗ゆえにわたしたちは怒りの世界および子に生まれたのです。つまり、赦しの出来事がなければ、神から断罪されているのです。もし、だれかがさらにアダムの墮落ゆえにわたしたちは生まれつき罪人であることを付加しようとするなら、わたしはそれを妨げはしません。ところで、じつに教会による永遠の見解は、こうなのです。預言者、使徒、そして古代の著述家によれば、すでに述べたように、原罪とはただ罪を帰せること (*imptatio*) ではなく、人間の本性自体に暗闇 (*caligo*) と邪悪 (*pravitas*) があるということなのです。さらに多くのことを、証言のなかに明らかにしていきましょう。そして、アウグスティヌス、フーゴー、そしてボナヴェントウラが述べることは、この見解と一致します。たとえ、他のもっと最近のものでさらに不敬なものが多少とも正しい見解から遠ざかり、解決できない詭弁をでっちあげるのであっても。ところで、フーゴーは非常に明白に、こう述べています。原罪とは精神における無知 (*ignorantia*) であり、意志における不服従 (*inobedientia*) である、と。

## 証言

定義が伝えられた後、証言を付け加えていきたいと思います。それは、男の種から生まれたすべての人間には、それとともに罪を運んできている、と断言しています。その結果、この教えは、最近の著述家による議論から生じたのではなく、預言者と使徒を通じて聖霊によってまさに伝えられたものであることが分かるのです。

この教えにふさわしい場所は、ローマの信徒への手紙5章にあります。「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」<sup>(10)</sup>。ゆえに、その他の者たちはアダムの墮落によって有罪〔罪人〕なのです。そして、何らかの仕方でも墮落が増殖することなくして、ただそれだけでその他の者が有罪である、と理解されてはいません。こう加えられています。「死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」。ヘブライ語のフレーズはこうです。彼らは罪を犯した。つまり、罪人であり、罪を、悪く断罪されるものをもっている。もし、ただ現実の過失だけが罪であるならば、自らなしたことによって、各自が罪人であるということになってしまいます。しかし今は、わたしたちはアダムの過失によって罪人であると明確にしているのですから、現実の過失のほかに、人間の本性には何かその他の罪があることが証言されていることになります。そして、その罪はただの帰責あるいは告発であると理解されないように、言葉の重みが考察されなければなりません。すべての者が罪を犯した。つまり、すべての者に悪が伝播した。それが罪である、と。

同じく。罪が支配した。死が支配した。つまり、人間は神の怒りによって打ちのめされ、神聖な光のない状態にあり、恐ろしい狂乱と永遠の破滅へと急いでいるのです。ローマの信徒への手紙、3章でいわれているように。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」<sup>(11)</sup>。つまり、神が栄光であると判断する、その栄光、およびそれによって〔人間を〕蘇らせる栄光のことです。

しかし、ローマの信徒への手紙7章と8章からは、させら明瞭に、原罪とはただの帰責あるいは、それによってわたしたちが死へと繋がれている隷属なのではなく、むしろ人間の本性そのものに伝達された悪であることを、わたしたちは学びます。7章。「わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い」<sup>(12)</sup>。というのも、五体の法則のことを彼は、わたしたちの内において神の律法と戦う何かであると呼んでいるからです。

それは、つまり無力であり、墮落した傾向のことです。

そして、8章。「肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです」<sup>(13)</sup>。これが人類に関する悲惨で残酷な記述です。というのも、言葉によって現実の悪だけについていわれているのではなく、本性そのものに受け継がれた悪についてかたられていることが、明らかに示されているからです。それを神に敵対する敵意 (inimicitia) と呼んでいるのです。人間の本性が神に敵対していることよりも、さらに残酷なことがいわれています。つまり、絶えず暗闇を自身とともにもって回ることで、そして神についての疑い、神かを遠ざける疑念、多種多様な強情〔命令不服従〕。こうした密やかな悪を世俗的で無頓着な者は理解しませんが、教会は悲嘆のなかである程度それを認識するのです。

エフェソの信徒への手紙2章。「ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした」<sup>(14)</sup>。ヘブライ語のフレーズで、怒りの子とは、つまり、罪人であり断罪されているということです。ゆえに、アブラハムに続く者とその他の人間は、ただ現実の過失のみによって断罪されているのではなく、むしろ悪の本性によって断罪されている、とパウロは断言するのです。この悪の本性は、わたしたちとともに繁殖すること自体からのものである、とわたしたちは主張し、実例を引き出すことも必要ないほどです。そして、この悪の本性がどのようなものであるかは、7章と8章で挙げられた文章が明らかにしています。

ヨハネによる福音書3章。「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」<sup>(15)</sup>。再生が必要となれば、古い本性は罪であると明らかにされなければならず、それは汚れたものなのです。

預言者の言葉が付け加えられます。詩編51編。「わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです」<sup>(16)</sup>。もちろん、彼は母の罪を嘆き悲しんでいるのではなく、自身のそれを嘆いているのです。ゆえに、わたしたちは形作られるとすぐに、わたしの塊のなかで、そしてまたわたし自身のなかで罪が生じると考えなければなりません。つまり、わたしたちは罪人であるだけでなく、自身とともに生れついて神からの離反と墮落した傾向〔罪のなかに〕にあるのです。ゆえに、人間のなかには罪があって、それは生れつきわたしたちとともに運ばれてくる、と証言されているのです。

創世記8章。「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ」<sup>(17)</sup>。これは、罪が習慣によっ



て運び込まれているだけではなく、心それ自体に、それが子どものときに生まれたときから付着した墮落である、と主張しています。というのも、ヘブライ語の一節においては、言葉はさらに明瞭だからです。人間の心の活動は、何か形作られたもの (πλάσμα) あるいは制作されたものであれ、悪なのです。つまり、心の塊そのものが壊れており、それぞれどこか心のなかにある、確かにすべての情動、あるいは衝動、あるいは激情 (όρμηαι) は悪いものであり、つまり、神から離反しているのです。

このように、詩編は若者の罪を、わたしたちが子どもに生まれつき運び込む、かのすべての塊であると呼び<sup>(18)</sup>、それは精神における暗闇であり、意志における神からの離反であり、そして心の強情さなのです。

エレミヤ書 17 章。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」<sup>(19)</sup>。つまり、神からの離反であり、たくさんの悲しみである。それは、人間の精神が神を蔑ろにし、神から逃げることから生じます。それがどれほどの悪であるか、だれもこのことを十分には理解していません。

こうした言説は、預言者と使徒のいうことが一致していることを明らかに示しています。しかし、簡潔さのようなものが人間の耳を通り過ぎてしまい、とりわけわたしたちのこのような暗闇と無頓着のなかにあるときには、わたしたちの悲惨がどれほど大きなものであるかを、わたしたちは見ないのです。鈍感な人間、快樂に酔いしれる者、あるいは栄光によって高められた者は、わずかしか神の怒りに気遣いしません。そして、自らが自らに甘え、この悪を小さくしてしまいます。神についての疑念をもち、神を蔑ろにし、自らの知恵と力に信頼し、傲慢で、見えを張り、他の欲望によって燃え盛っているのです。したがって、こうした短い言説は、それが罪と人間の惨状 (calamitas) の原因についてのあらゆる教えを含んでいるにもかかわらず、魂を少ししか動かさないのです。というのも、昔の教えの習慣は、そうした短い言説によって、あたかも格言のように、すぐれた教えの成分を封じ込めることになっていましたから。それを教会は福音に仕えることで解明し説明しなければならないのです。その結果、このなかに含まれていることがらの大きさを、ある程度明らかにすることになるのです。短く、こういわれているように。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く」<sup>(20)</sup>。しかし、教会は説明するなかで、どれほどのことがらがそこに含まれているか、ある程度見て取るのです。このように、この部分に関して、罪と人間の悲惨の原因について、たくさんの簡潔な格言 (γνώμαι) が伝えられています。そこにはもっとも教養ある形ですべてが

包含されていて、その言葉のなかでは、語句の正確な意味と重みが熱心に熟考されるのです。

どれほどエレミヤとパウロのいうことがぴったりと一致しているか、考えるように望みます。「なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです」<sup>(21)</sup>。意味は明白かつ明快です。それは、人間のなかには、この死すべき生においては、神を蔑ろにし、神から遠ざかり、神に対する怒りのようなものがあるし、またそこに止まっているということを断言しています。そして、反対に神が不可とするがゆえに、さらにこの言葉が付加されるのです。この無力な本性は、とパウロはいますが、これは律法に従わされることは不可能なのです。決して律法を満たすことはなく、人間は、常に疑いや、誤った安心や、不信や、そしてさまざまな情欲の炎によって衰弱しているのです。しかし、人間のなかには神に敵対する敵意があるといわれる以上に、どのような悲しいことがあるでしょうか。だが、このことをわが主イエス・キリストは、信じる者のなかに埋め込んだのです。それは、主の位置が示されるためです。パウロがいうことの大きさは、言葉によって解明されえません。しかし、思考はこれと詳しく関わり、わたしたちのなかにそれを凝視し、わたしたちの汚れを認識し、嘆き悲しみます。そして、仲介者についての福音を冀うのです。

さて、エレミヤの言葉と比べてみましょう。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」<sup>(22)</sup>。まず逆向きの邪悪 (*perversum*) についていわれていて、それはつまり、神からの離反です。これは、心は神と敵対関係にあるというパウロと、全く一致しています。というのも、神との離反にあって心は神の光によって支配されていません。それは、疑いによって苦しめられ、怒りと憐れみを認識することもなく、神への恐れも、信頼も、愛もなく、自身を愛氏、自分たちの知恵が愛され、これに信頼し、神についての見解を捏造し、不安定な衝動をもって、神の律法から逸脱し、野心と、復讐への欲望や他の情火をもつのです。次いで、こういわれるとき、無力に対する罰が記されます。惨めで、あるいは悲しみに満ち溢れて、と。心は光を剥奪されて、神の慰めは悲しみと、絶望と、永遠の悲嘆によって覆い隠されています。こうした罰のなかにはたくさんの恐ろしい罪が包含されています。そして、それほど悪は大きなものなので、わたしたち、あるいは他の被造物によって、その巨大さは十分に理解されないでいるのです。

いわれていることの意味は同じです。「恐怖に襲われて、わたしは言いました」<sup>(23)</sup>。つまり、わたしの動揺あるいは恐怖のなかで、「すべての人間は嘘つきである」ということ。

つまり、自分の汚さと神の怒りを認識して怯えているとき、すべての人間が嘘つきである、とわたしは再認識したのです。つまり、彼らは神について正しく考えることもなく、神について疑い、その怒りを十分に恐れることも、その憐れみに十分信頼することもない、ということなのです。

わたしは証言を列挙し、短い説明に触れました。それは、読者が言葉が端的であるがゆえに欺かれたりせず、ペラギウス派や他の多くの軽薄な霊に対抗して、単純でそのままの意味に止まるよう、注意を促すためです。ペラギウス派は、名をあげることさえなく、原罪のすべての教えを否定します。オッカムやその他多くの最近の人々は、原罪という名前は保持するものの、その内実は縮小しています。彼らは、こうした悪が神の律法に逆らうもの、精神における暗闇、意志と心における頑なさ、つまり我欲〔強い欲望〕(concupiscentia)と呼ばれているものであることを否定するのです。しかし、さらに後に述べるように、これはパウロによるローマの信徒への手紙7章および8章の証言によって、明らかに反駁されます。彼らはこの悪がただ原罪による罰であると呼びます。最初の墮落によるのと同様の罰および生まれつき個人の内にある罪というように。したがって、すべての意味内容をより明白にするために、その原因と結果について述べることにしましょう。

最初の墮落が生じた原因は、悪魔 (Diabolus) とアダムとエヴァの意志 (voluntas Adae et Evae) にあります。彼らの意志は悪魔と同調し、神の命令から、自分自身の自由によって離反したのです。

ところで、作用因 (efficientes causae) が語られているのですが、それは何かに値するものです。ちょうどアダムとエヴァが作用因であり、それは自らとその子孫にとって罪に値し、これら自身の無力あるいは邪悪にも値します。これには墮落が続き、神の光は追い払われました。なぜなら、最初の両親が罪を犯した後、そうした確かな神の知は失われてしまったからです。それは精神に植え付けられていて、まっすぐな意志であり、かつ神の律法との心的一致でした。そして、墮落後は自身そうしたものとなり、そうした子孫を残すようになったのです。

原罪はどこにあるのでしょうか。それは魂と知覚する能力およびそうした機関のなかにあります。というのも、精神には暗闇があり、意志には神からの離反があり、わたしたちの愛は無秩序で変わりやすく、腐敗した傾向と心には精神による正しい判断に反抗する頑なさがあるからです。このような病の場所で、いわば、あるいはその主体を示すことで、それをそのものにおける質量 (materia in qua) と呼ぶのですが、そこで悪はふ

さわしく考察されるのです。

規準となる判断について、教養ある者にとっては簡単です。とはいえ、無学の者にとっては、こうした問題について、さまざまに混乱させられてしまいます。しかし、わたしは教会で言葉に関する戦争(λογομαχία)をしようとは望んでいません。しかし、明瞭に、詭弁なしに、かつ曖昧なところなく、真実の思想を語りたいのです。正しく教育された者は、一般的に罪の形式が罰に値し、あるいはその罪人である個人の断罪に値することを知っています。しかし、何かの悪とのこの関わりは、不意に降りかかってくるものです。ゆえに、悪との関係の最近の基礎が探究されなければなりません。いうところの、もっとも近い質量です。ところで、こうした罪悪の基礎は、わたしたちとともに生れついた人間のなかの悪徳それ自体であり、それは無力とか腐敗した傾向とか我欲とかいわれているものです。というのも、こうした名称はすべて同じ悪のことを示しているか、あるいはむしろ悪の最大の混合物についていわれているからです。というのも、我欲は本性のなかにある強い欲望について理解されるべきではなく、むしろあらゆる欲望の無秩序(ἀταξία)について理解されるべきだからです。こうした悪徳のなかにはそれ自身のある種の形式があることを、弁証家は知っています。悪徳に固有な何かであり、すなわち正直さの衰弱であり、神の律法からそれるもの、あるいは無秩序です。

神についての無知、疑い、神への恐れのないこと、愛のないことは、無力〔光の喪失・反抗〕(defectus)であると宣言されています。無力とは、わたしたちが自分自身を愛すること〔自己愛〕における無秩序であり、それはすなわち混乱した秩序であり、そうしてサウルは神よりもむしろ自分自身を愛したのです。これと同じように、他の腐敗した傾向についても判断されます。こうしたすべての欲望の無秩序を、著述家たちは我欲(concupiscentia)と呼んだのでした。

後に十分述べるように、この無秩序と、神によって作られた欲求そのものとは、注意深く区別されなければなりません。したがって、原罪の規準(formale peccati originis)とは何かが問われるとき、それは罪悪であると、と正しく答えられることになります。次いで、この罪悪と原罪との関係の基礎が、まさに探究されなければなりません。それは、すでに述べたように、わたしたちとともに生れついている、まさに悪徳であり、それは神の律法に逆らう悪です。それは悪の最大の混乱であり、ちょうどもしだれかが、多くの死が同時にあるというように、こうした混乱の規準〔原理〕が無力〔光の喪失〕にあることは、容易に理解されるのです。さらに、罪が赦されない場合には、罪悪がさらに

加わることとなります。しかし、赦された場合でも、この世の生においては、それにもかかわらず今なお、そうした混乱の大部分が残存しているのであり、したがって無力も残ることになり、それが混乱の原理となっているのです。

このことは明瞭であり、不明瞭なものを何も含んではいません。無教養な修道士たちは罪悪を無視し、罪の規準が無力にあるといい、これは再生において取り払われ、質量だけが残っているというのです。これは神によって作られた欲望そのものであると彼らは理解し、それは善いものである、と。しかし、彼らは何がいわれているのか、理解していません。というのも、病が残っているとき、すなわち疑いや、軽蔑や、頑なさが残存している場合、無力が止まっていることは容易に理解されるからです。なぜなら、病というその名称は、これは残ったままであり、それは無力〔光の喪失〕を指しているのです。

聖霊は人間の自然の本性を癒し始めていますが、しかし、突然にすべての病が取り除かれるわけではありません。ちょうどルカによる福音書 10 章で、サマリア人が傷ついた人をすぐに治療したのではなく、はじめは傷にぶどう酒を注いで血を洗い流し、次にバルサムを染み込ませて痛みを和らげ、傷口がふさがれ始めて、それから包帯された傷の病人をロバに乗せ、続いて宿屋で治療するように命じたように<sup>(24)</sup>。同じように、キリストはわたしたちにその身体を与えました。わたしたちの罪による罰を負うためです。それから、わたしたちの傷に福音を注ぎ、次いでそれを縫い合わせ、見えなくしてからわたしたちの罪を赦しました。しかし、それにもかかわらずキリストは、今なお教会において病が、十字架と祈りによる不断の訓練によって癒されることを望んでいます。こうした比喩は、原罪の赦しにおいて咎は取り除かれたことを明示しますが、しかし、すぐに傷が治療されたわけではないことも明示しています。ところで、ちょうど傷の規準とは部分が引き裂かれることであるように、それは繋がれなければなりません。同じように、こうした精神、意志、そして心の歪みのなかには、ある種の分裂〔引き裂き〕があるのであり、いうならば、これは本当の悲惨であり苛酷です。その規準を弁証家は無力〔喪失〕(defectus)あるいは欠如(privatio)あるいは欠損(στερήσεις)、すなわち無秩序(ἀταξία)、神の律法からの離反と十分に理解しています。

この場所で目的因について語られる場合には、罰が調べられなければなりません。そして、その作用が。原罪による罰とは身体の死であり、他の巨大な災難です。これは、人間の無知とあらゆる力の弱さから生じるもので、神の怒りと永遠の断罪に値するものです。こうパウロがいうように。「生まれながらに神の怒りを受けるべき者」<sup>(25)</sup>。

同じく、ここには悪魔による暴政があります。これは虚弱な性質のものを恐ろしい仕方です。ある悪から他の悪へと突き落とします。ちょうどオディプスの無知が父親の殺害に繋がったように、その後の無知が母親を妻としてめとることに繋がったのです。ここに生まれた息子は王国について抗争し、互いが傷で殺されることになりました。父は目をえぐり取られて街を追い出され、そのあと大地の割れ目へと呑み込まれたのでした。このように嫌なことが、悪魔の横暴に対して防御されない場合には、人間に起こるのです。はっきりとしたぞっとするような悪魔のかみつきを感じない人間はいません。そこで次の聖句が学ばなければなりません。「彼〔敵意のヘビ〕はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」<sup>(26)</sup>。しかし、再度ヘビの頭はわたしたちの主イエス・キリストによって粉碎されることを学びましょう。

最初の墮罪による罰はさまざまな人間的無知であり、こうした強い欲望による頑なさですが、これは我欲と呼ばれています。しかし、これは最初の墮罪の罰であると同時に、生まれた者のなかにある罪そのものです。つまり、ある種の罪悪〔咎〕であり、神による断罪に値するものです。だれ一人として修道士のなかで、火口と呼ばれている、この邪悪な傾向が、唯一の罰であると正しくいう者はいませんでした。このように〔罪の〕原因と作用とを列挙することは、あいまいなところなしに熱心な者をして、原罪に関する教会の教えを理解するのを助けてくれるのです。

ここで、ある人々が次のようにいうことについて、読者には注意が喚起されなければなりません。もし意志的でない場合には罪はない、と。こうしたことは、市民的な過失については伝えられてきています。というのも、法廷による判断では意志的な過失だけが罰せられるからで、偶然による殺人は当局によって罰せられないのです。しかし、こうしたことを罪に関する教会の教えや神による判断に転用してはなりません。

アウグスティヌスは巧妙に、原罪は意志的なものであるとしました。なぜなら、それをわたしたちは楽しんでいるからです。しかし、こうした賢明な解釈は、あの当局による判断とは遠くかけ離れています。時ならぬ市民社会的なものと福音とを混同しないことは、より賢明であるといえます。したがって、そこでいわれていることは方法的な判断について述べられていると答えることで十分なのです。

こうしたことも強いわれています。自然本性は善である。これは、神のわざによる〔人間を除いた〕残りのものまでは真実です。しかし、人間の自然の本性はひどく損なわれていて、しかも汚れています。ちょうどルカによる福音書 10 章で傷ついた者のことが

絵のように描かれているように<sup>(27)</sup>。わたしたちのなかの無傷の本性という贈り物は剥ぎ取られてしまっています。つまり、神についての確たる知、知恵、正しさ、そしてこれに加えて残りの自然の本性もまた傷つけられてしまっています。すなわち、邪悪な我欲、死、そして魂と身体によるさまざまな悪というように。

しかし、人間のなかに残っている神のわざと、それ自体で墮落しているものとは、区別されます。ちょうど数に関する知が善きものであるように。というのも、それは神によって人間の内に植え付けられているからです。このように、すべての真の知については、その秩序から理解されなければなりません。したがって、法に関する自然の知は、善いものということになります。確かに、アダムの墮罪以後これはより曖昧になり始め、疑いによってそれへの賛同は妨げられてはいるにせよ、それにもかかわらず、その光が残存している限りでは、それは善いものであり神のわざなのです。したがって、真にそこから作り上げられた学芸や法は、善いものなのです。とはいえ、そうこうしている内にも数多くの疑念が続いて生じてくるものです。神はわたしたちのことを気遣っているのかどうか、罰するのかどうか、わたしたちのことを聞いているのかどうか、助けようと望んでいるのかどうか、わたしたちを受け容れようと望んでいるのかどうか、わたしたちに永遠の栄光を与えようと望んでいるのかどうか等々というように。こうした疑念はそれそのものが悪徳です。というのも、これは神の律法と争う悪だからです。

このように、わたしたちの情念 (affectus) は二重になっています。一方では神の律法によって、子どもや、配偶者や、良心を愛するように命じられています。他方では神の律法によって、神を軽蔑することや、神に敵対して不平をいうことや、羨望、他人の配偶者を愛することなどが禁じられています。

ところで、たとえこうした本性の腐敗のなかで、依然として神の律法から命じられる情念が損なわれていて、しかも偶然によって悪徳となるにしても、というのもこの情念は神への愛によって支配されていないので、しばしば子どものために人間は神に対して罪を犯してしまうのですが、それにもかかわらず、愛情 (φιλοστοργία) それ自体は神によって命じられていて、再生した者のなかに止まり、そこではより純粋なものにならなければなりません。アブラハムはイシュマエルとイサクを激しく愛しましたが、それにもかかわらず、神からの命令を先んじて置きました。

したがって、人間からすべての情念を取り去るとか、あるいは同じようにすべての情念が断罪されているなどと考えるはなりません。ちょうど狂乱した再洗礼派がストア派

の不動〔アパテイア (ἀπάθειαν)〕を強く主張するように。それどころか、情動なしの、欲望などの、何らかの情念なしの生など、決してありえないのです。神の律法は情念について、こう命じています。「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」<sup>(28)</sup>など。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」<sup>(29)</sup>。そして、ローマの信徒への手紙1章では、残酷な犯罪のなかに無情〔自然な情念に欠けていること (ἄστοργος)〕があげられています。

したがって、自然のなかには損なわれていない情念があったのです。しかし、それは秩序づけられて純化されなければなりません。神、両親、子ども、配偶者、兄弟、そして他の人間を愛すること。神を知ることにおける喜び、その被造物を用いるなかでの神の秩序、悪魔に対する憎しみ。そして、永遠の生においては、神を見ることのなかにと巨大な幸せがあり、神とすべての天的なものへの愛があることでしょう。このように、キリストのなかには真正な情念がありましたが、それは秩序づけられて純化されたものでした。神への愛、母への、弟子たちへの、友への愛、喜び、悲しみ、怒り。マルコによる福音書3章でいわれているように。「イエスは怒って人々を見まわし」<sup>(30)</sup>。そして、憐れみについて明瞭にキリストの腹の中の情動があるといわれています。そして、巨大な悲しみについてマタイによる福音書26章では、こういわれています。「わたしは死ぬばかりに悲しい」<sup>(31)</sup>。ゆえに、情念は神によって人間の自然の本性のなかに基礎づけられてあると認識されなければなりません。それを神はそれ自身が自らの像であるとともに自身の意志の印であることを望んでいるのです。神は真にわたしたちを愛しています。人間が自然の本性によって子どもを愛するように。真の憐れみによってわたしたちの神は刺激されます。わたしたちが永遠の悲惨のなかで墮落するのを見るとき。それを神は自身で理解されています。同じように、わたしたちは子どもの不幸に対する本性的な憐れみによって動かされますが、キリストが次のようにいう通りなのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」<sup>(32)</sup>。そして、ヨハネはいいます。「神は愛です」<sup>(33)</sup>。つまり、神はわたしたちに対する真の愛で満たされており、わたしたちの滅亡を望んではないのです。そして、パウロはテトスへの手紙3章で、こう述べます。「わたしたちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛とが現れたときに」<sup>(34)</sup>。このように神は愛という情念 (στοργή) をわたしたちに刻印し、自身の意志についての忠告者となることを望んだのです。

それゆえに、情念は注意深く考察され、正しく制御されなければなりません。という



のも、今や墮罪後、この情念はでたらめにうろつき回り、しかも汚染されているからです。これは神にとって非常に嘆かわしいことです。というのも、それはわたしたちに神の意志について注意を促すために与えられているものだからです。しかし、それにもかかわらず、禁止されている情念から愛 (στοργαί) は区別されなければなりません。神への軽蔑、神に反する不平、悪意、悪事における喜びから。ちょうど、ヘロディアスやフルヴィアなどが復讐の際に喜んだように。そして、他にも数え上げることができないほどの激情から。とくに神の律法によって禁止されている情念は、それ自体が邪悪であり抑えられるべきものであることが知られなければなりません。

慣例的にいわれているこのこと、つまり自然は善である、ということに対して、わたしはこう答えます。神によって作られたものと、作られていない墮落とは区別されるように、と。アキレスにおける英雄的な怒りは善いものです。というのも、それは真に神のわざだからです。しかし、神の認識によって支配されていないので、損なわれたものにされてしまいます。さらに、自身への信頼によってもつれたものとなり、神への祈りと信頼によって前方を照らすことは決してありません。こうした無力は軽い罪ではありません。それゆえに、善きものでさえ損なわれて跳ね返され、犯罪人となってしまうのです。

それに対して、ダビデののなかにある同じような怒りは、より純粋なものです。そのなかに神の認識、恐れ、祈り、信頼がさらに加わっているからです。このように、再生した者のなかには愛 (στοργαί) が止まっていることを、わたしたちは知ります。しかし、それはより正しく制御され秩序の内に還元されています。そして、その範囲内でより純粋なものとなっています。慣例的な問いが語られて残ります。つまり、洗礼後、子どものなかには罪が存在するのか、あるいは我欲は罪であるのかどうか、そう正しくいえるのかということです。同じく、再生した成人に罪があると正しくいえるのかどうか。わたしはこう答えます。再生した成人について、罪は残存している、とすべての人々は認め強られる、と。それゆえに、ヨハネはいいました。「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません」<sup>(35)</sup>。ゆえに、再生した者のなかにも情欲の火口 (flamas cupiditatum) が数多くある、とわたしたちは告白します。それゆえに、それを罪といわれます。というのも、突然の出来事が意志と一致して人を掴んでしまうからです。こうしたことを払い落とすのは、しばしば困難です。しかし、たとえもしこうしたことを反対者たちが告白するにしても、それにもかかわらず、彼らはこうした悪そのものを小さくし、自分たちは現実の罪について語るだけである、と公言

します。彼らは自身の本性が死すべきものであることを否定します。こうした行動の根は、すなわち、生まれたばかりの病は、再生した者のなかにも残存しています。つまり、邪悪な傾向ですが、一言でいえば、こうしたものが罪ではなく、神の律法と争う悪でも決してない、と彼らはいうのです。

しかし、こうした悪を蔑ろにすることが、いかに無謀なことか考えてみてください。すなわち、神についての疑い、神の怒りを無視して安全でいること、神から逃走しようという疑念、そしてその他の多くの疫病〔死をもたらすもの〕。これは、たとえもし常に注目をひくものではないにしても、それにもかかわらず、そこに存在し、しばしば不意に現れるのです。ちょうどカトーが災難のなかで暗闇へとまっすぐに沈んでしまい、摂理が存在することを否定したように。サウルは神に対して、それほどまでに厳しく罰せられることを怒りました。こうした罪は決して覆い隠されてはならず、はっきりと認識されなければなりません。その結果、わたしたちはこれに対抗し、これらに反して援助を冀うことを学ぶのです。

したがって、わたしたちはこう答えます。洗礼において、罪悪〔咎〕あるいは帰責に關しての罪は取り除かれます。しかし、病それ自体は止まります。これは神の律法と争う悪であり、永遠の死に値するものであり、決して免除されることはありません。こういわれているように。「いかに幸いなことでしょう。背きを赦され、罪を覆っていたいただいた者は」<sup>(36)</sup>。罪という名称についてわたしたちは論争しているわけではありません。その内容に意見の相違があるのです。敵対者たちは、再生した者に残るこの病が、神の律法と争う悪ではない、と強く主張します。この誤りは非難されなければなりません。しかし、パウロの証言は明瞭です。ローマの信徒への手紙7章と8章でパウロは明快に述べています。「わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります」<sup>(37)</sup>。この証言から、どのようなペテンも逃れることはできません。

しかし、敵対者たちは数多くの誤った仮説を立てます。第一に、精神の暗闇および意志における悪徳については、何も語りません。第二に、我欲をただ感覚に関するものとして理解し、それは自然の欲望であると理解するのです。それは欲望の無秩序 (*ἀταξία*) であると同時に、精神の暗闇と意志のなかの悪を含んでいると理解しなければならないにもかかわらず。第三に、こうした誤った仮説の上に、さらに神の律法は現実の罪だけを断罪するという付加をします。こうした見解は、わたしたちの〔この世での市民的な〕規律

についてだけ語られる哲学へと、神の律法を変容してしまいます。こうしたくだらない妄想は、恩恵についての教えを曖昧なものにしてしまいます。というのも、人間は律法を実現することで正しい〔義である〕と妄想し、信仰に関する教えの光を失ってしまうからです。

しかし、預言者および使徒によるすべての教えは、人間が神の律法を満たすことはなく、すべての人々のなかに罪が止まっていると叫んでいます。そして、仲介者〔キリスト〕がこのことのゆえにわたしたちを受け容れると述べ、キリストへの信頼によって正しい者〔義人〕と宣告される、と彼らは明示しているのです。

しかし、こうした意見の不一致は、偽善者を判断することでは解消されません。常に偽善者たちはこの問題に関して真の教会とは一致してきませんでしたし、これからも一致しません。というのも、人間の理性は聖なる光なしに、こうした内的な罪がいかにもほどの悪であるか、見分けられないからです。たとえもし、生の大きな混乱や、とてつもない暗闇から、何にしてもそれを見積もらざるをえなかったにせよ。

## 現実の罪

根源悪 (originale malum) とは、すでに述べたように、精神における暗闇であり、神からの意志の離反であり、神の律法に逆らう心の強情さでした。こうした悪は行為とは呼ばれませんが、しかし、ここから内的にも外的にも現実の罪が生じてくるのです。精神においては絶え間ない疑い、冒瀆、意志においては安心と無視、神への疑念、自己賞賛、神の命令よりも自分たちの生活と意志とを優先すること、そしてとてつもない混乱と悪徳に満ちた情念という巨大な塊。わたしたちは根源悪が無為なもの〔何も働いていないもの〕とは思いません。というのも、たとえもしある少数の人々が立派な規律によって制御されるにしても、それにもかかわらず魂には大きな疑いや、神から外れた数多くの情動や、神の律法に逆らうさまざまな掻き乱しが、明らかにされなければならないからです。エレミヤかせいうように。「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」<sup>(38)</sup>。

それゆえに、常に根源悪とともに現実の罪があることとなります。これは再生していない者においてすべて死に至るものです。そして、全人格はその果実とともに非難されなければなりません。ヨハネがいうように。「御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」<sup>(39)</sup>。したがって、たとえもしアリストイ

デス、ファビウス、ポンポニウス、アッティクスその他に多大な徳が備わっているにせよ、それにもかかわらず、わたしたちは彼らのなかに根源悪が止まっていて、心は疑いと数多くの悪徳な情念で一杯で、キリストの認識はなく、神への真の祈りは決してなかったことを知るので。

次に、わたしたちは非常に多くの最高の男たちのことを考えてみましょう。彼らのなかには素晴らしい徳がありましたが、それにもかかわらず、明らかな恥辱によって汚されています。このことから、彼らが悪魔の力のなかに捉えられていることが理解されます。その結果、ヘラクレス、テミストクレス、パウサニウス、アレクサンダー、その他多くの人々の生き方のなかに、何というほどの不道徳があったことか。はじめは極めて規律正しかったのに。こうした事例はわたしたちに、キリストの認識を小さくしてはならないことに注意を促しています。ちょうど異教徒を天にもち上げる多くの人々がするように。それどころか、跳ね返された者たちがいるを見て、そしてさまざまな仕方ではどく墮落した者たちがいるのを見て、より多く神の怒りを恐れるようにしましょう。彼らのなかには多くの素晴らしい徳がはじめはあったにもかかわらず、神の子を蔑ろにすることのないように、救い主である神の子なしに人間があると妄想することのないように、神の子の血を踏みつけることのないようにしましょう。こうしたことは再生していない者にはじめにあってあります。この者たちのなかにあるすべての現実の罪は死に至るものであり、すなわち根源的なものなのです。

しかし、回復された者について語られる場合、続いて赦されるものと死に至るもの、さらに赦される罪〔小罪〕は根源悪それ自体と呼ばれ、現実の罪は神の律法とより内的に争うもので、それには再生した者であるにもかかわらず抵抗するものであり、さらに無知や無視という多くの罪とも抵抗しています。〔ロンバルドゥスの〕命題が神の律法に反するのではない、神の律法のそばを通るようなある種の小罪があるとでまかしをいうように、わたしたちはこの悪を縮小しはしません。この誤りは非難されなければなりません。というのも、些細なと呼ばれるこの罪〔小罪〕は、神の律法に逆らう生来的な悪であり、その本性からして死に至るものだからです。つまり、永遠の怒りによって人間が漸罪されているがゆえに、もし神の子によって回復されなければ赦されないものなのです。しかし、再生した者のなかにこの世の生で止まり続ける罪と、恩恵、聖霊、そして信仰が失われたがゆえにある罪とは、区別されなければなりません。したがって、再生した後に陥るなかでの、神の律法に逆らう内的あるいは外的行為は現実的に死に至るものであり、良心に反す

ることになります。そうした行為は永遠の怒りにより罪悪とされます。というのも、良心に反して墮落するような者に、聖霊は注がれることはないと思われるからです。誤りは明らかにされ非難されなければなりません。罪を判定することについて、わたしたちは選ぶのことを吟味することなく、神の意志を示すような、わたしたちに伝えられている神の言葉に注目しましょう。そして、神の判断を認識しながら、事例と言葉のなかにある計画を恐れるようにしましょう。愚かな安心や盲目を確立しないようにしましょう。

アダムとエヴァは選ばれていました。それにもかかわらず、墮落のなかでまさに聖霊を失ってしまいました。神に離反し、永遠の怒りに値するものとなってしまったのです。パウロがいうように。「一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下された」<sup>(40)</sup>。

そして申命記9章。「アロンに対しても、主は激しく怒って滅ぼそうそされたが、わたしはそのとき、アロンのためにも祈った」<sup>(41)</sup>。神が真に怒っているというときの聖霊のもっとも悲しい言葉から、わたしたちはだれも逃れられません。神は岩のように冷淡で禁欲的だと勝手に想像しないようにしましょう。というのも、たとえもし一方で神は怒っており、他方で人間がいるにしても、それにもかかわらず、アロンへの怒りは存在し、アロンはそのとき恩恵のなかにはおらず、永遠の罰という罪悪にあったとわたしたちは考えます。わたしたちはアロンの墮落で身震いすべきです。彼は恐怖から狂気へと突き進み、エジプトの礼拝を採用しました。こうした事例によって警告されていることは、わたしたちは安心してはならないということで、選ばれた者も再生した者も悲惨な仕方でも墮落しうることを認識するのです。墮落した者は神の怒りを知らなければならず、再び神のほうへと向きを変えられなければなりません。神へと戻ることを、墮落の巨大さによって妨げてはなりません。というのも、恩恵は罪の上に溢れ出るのであり、この場所ですべておこななくてはなりません。そして、こうしたアロンの物語は、大きく恐るべき罪が許されるために、悔い改めがあるということを証言しています。このように、ダビデ、サロモン、マナセの墮落について考えられなければなりません。

そして、ヨハネは明確にこういいます。「子たちよ、だれにも惑わされないようにしましょう。義を行う者は、御子と同じように正しい人です。罪を犯す者は悪魔に属します」<sup>(42)</sup>。

そして、エフェソの信徒への手紙。「これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです」<sup>(43)</sup>。

したがって、選ばれた者と再生した者が恩恵を逃す可能性があるということは明言されなければなりません。さらに、この世の生において再生した者のすべてのなかに止まっ

ている罪を区別しなければならないということも。そして、他の墮落から聖霊を追い払ってはなりません。それゆえに恩恵は失われてしまいます。

さらに、パウロはローマの信徒への手紙8章で、この区別を伝えています。「肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きています」<sup>(44)</sup>。この聖人のなかには、肉の行い、すなわち、多くの悪徳への傾向、疑い、安心、不信、誤った自信、邪悪な情念が存在することを、わたしははっきりと認めます。しかし、これらに対して聖霊によって戦うべきである、と彼はいいます。つまり、霊的な活動、神への祈り、畏れ、信仰、神を見つめる霊的な忍耐や貞潔によって。すると、再生した者は恩恵のなから止まります。たとえもし彼らのなかにそうした悪徳の情念が存在するにしても、それにもかかわらずそれらと戦い、信仰によってキリストゆえの罪の赦しを認識するならば。しかし、もしこれらと戦うことがないならば、死に至る者となると彼はいいます。

さらに、戦うことのない者がだれなのか、理解できるように彼は段階を設けました。すなわち、良心に反して違反しているということ、つまり、知りながら意志的にふけているのか、あるいは依然として外的な行いにおいて、そうした悪徳の情動や情火に従っているのか。それゆえ、こうした区別について人間は入念に教えられなければなりません。良心に反する墮落を警戒し、墮落しても再び神のほうへと向け変えられるように。

さらに、ストア派の以下のような議論も嫌悪されなければなりません。それはすべての罪は同じであるというような議論を保持し、恐るべき墮落に陥ったときでさえ、選ばれた者は常に聖霊を保ち続けるといいます。ところで、わたしは言葉について争いを生じさせようとは思いませんが、それにもかかわらず、いつものように罪を死に至るものと名づけ、君臨し支配する罪が語られ、こうしたことに注意を促すことは、それに関心を寄せる熱心な者にとっては有益です。というのも、パウロがローマの信徒への手紙6章で「あなたがたの死すべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません」<sup>(45)</sup>というとき、ここでいわれた、まさにこうした罪の区別そのものについて教えているのです。再生した者の内に罪が存在することをわたしは告白します。しかし、信仰とよき良心を保ち続ける限り、つまり、罪に従うことなくこれに抗う限り、それは君臨するものでも、支配するものでもないものなのです。しかし、もしこれが支配することになれば、永遠の破滅がもたらされ、言葉の強調は、罪の恐ろしさと力を明らかにします。

罪悪が赦されない場合、罪が勢力をふるいます。それは神の怒りに火をつけ、人間を神

から引き離します。自らの弱さによって、そして悪魔によって駆り立てられて、人間は神から見捨てられます。その結果、ある悪から他の悪へと突進し、悪事と罰とを積み重ねます。ちょうどサウルが、聖霊が与えられ、もっとも素晴らしい徳と輝かしい勝利によって飾られていたとき、嫉妬心の最初の情火に屈してしまいました。それは初めの内は抵抗するのも容易でした。アロンがその兄弟に対する嫉妬に抵抗したように。したがって、サウルがそれにふけるようになると、罪が勢力をふるい始めました。つまり、彼は罪惡に止まり、神の怒りは掻き立てられ、聖霊は追い払われて乱され、神から見捨てられた精神はますます弱り、ますます情念に従うようになってしまいました。すると、悪魔は狂乱を強め、祭司職の殺害と多くの国家的災難が続きました。これは、ようやく軍隊が派遣されてサウルが死に、永遠の罰のなかで滅びるまで続きます。こうしたもっとも悲惨な情景を、わたしたちはしばしば熟考すべきです。罪に対する神の怒りの巨大さを理解するために。

すべての歴史はもっとも悲惨な事例で満ちています。それらを讀んだり聞いたりするとき、精神のなかでこれらの事例がわたしたちに、勢力をふるう罪というものがどのようなものなのか、教えられるということが生じることになります。

再洗礼派の指導者は言いわけの宗教によって暴動を駆り立てています。神の靈感を偽って誇示し、情欲にふけり、配偶者を殺し、ついには捕えられて白熱した鉄で引き裂かれるのです。これらは勢力をふるう罪の実例です。

さらに、より古いいい方があるのが分かります。というのも、詩編 119 編にこういわれているからです。「わたしの足どりを確かなものにしてください。どのような悪もわたしを支配しませんように」<sup>(46)</sup>。この言葉は毎日の祈りのなかでわたしたちに繰り返されるべきものであると同時に、これによって勢力をふるう罪がどれほど恐ろしいものであるか、理解されるべきです。わたしたちのなかで罪が勢力をふるうことのないように、わたしの足どりを確かなものにしてください。わたしを怒りの容器にしないように、カイン、サウル、ユダ、アハブ、オイディプス、アトレウス、テュエステース、ネロ、その他人類の疫病のように、跳ね返されることのないように。

さらに、支配 (dominatio) という呼び方はモーセから取られたものだと思われます。というのも、創世記 4 章にこういわれているからです。「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」<sup>(47)</sup>。この法の主張は入念に考察されなければなりません。というのも、ここには三つの優れた条項に関する教えが含まれているからで

す。第一に、これは内的な正しさと供犠の区別を教えています。供犠は、もしそれがよいものなら喜ばれます。つまり、供犠は、もし精神が不敬虔なものであるなら、神に喜ばれることはないということです。第二に、これは来るべき裁きについて公言し、この世の安心について記しています。こういわれているように。罪は戸口で待ち伏せている。つまり、精神が神の怒りと罰の感覚によって打ちめされない限り、知られることなく、恐れを吹き込むことのない、と。このように、ネロとカリギュラは何の不安もなく自らの狂乱に耽りました。そして、これは罰がもたらされるまで、一般大衆にはいつものことなのです。さらに、これはなぜ普遍的な判断が止まっているかを教える、普遍的な警告なのです。というのも、不敬虔な悪事がこの世の生において罰せられない場合、また別の生と別の裁きが残っていなければならないことになり、そこですべてが罰せられるということになってしまいますから。このように、この最初の警告において、続いて来るべき裁きについての教えが伝えられなければならないのです。第三に、始めたばかりの服従について命令されています。「罪はお前を求める。お前はそれを支配せねばならない」。

これまで神の裁きについて語られたので、こう尋ねられるでしょう。したがって、わたしたちの内に邪悪な情欲に火がつけられているとき、わたしは何をしたらよいのか、と。これには、まず律法が前に置かれ、悪徳の情念に対して戦うように命じている、と答えます。しかし、律法を知るだけでは十分ではありません。さらに、情念を制御するそうした熱心さが神に喜ばれるかどうか、どれほどそうした弱さのなかで悪魔が抑制されるか、本性による弱さに打ち勝つことができるのかどうかを知る必要があります。これは次の約束と比較して教えられます。「彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」<sup>(48)</sup>。このように父が律法を宣教するために、この約束を授けたことを疑う余地がありません。そして、強情な情念がどこに由来するかを子に教え、来るべき子孫のために回復が約束されていること、そしてこのゆえに神がわたしたちの弱さを助けようとし、悪魔を押しとどめようとしていることも。

たとえばヨハネはもっとも賢明にこの約束を解釈して、こう述べています。「悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです」<sup>(49)</sup>。つまり、わたしたちを罪から解放し助けるために。その結果、わたしたちが神に従えるようになり、さらにわたしたちを悪魔から守るために。それどころか、ついにはすっかり罪と死とを滅ぼして、正しさと永遠の生を回復させるために。それゆえ教父たちは、情念が抑制されるように律法だけを教えたのではなく、そのような弱さのなかであってどのように服従が果たされる



のか、どのようにして神に喜ばれるのか、教えたのです。そのすべては支配するという言葉のなかに表されています。というのも、仲介者の援助なしにはわたしたちは支配されえない、つまり、罪悪から解放され、悪魔とわたしたちの弱さに打ち勝つことはできない、ということなのです。

したがって、こうした教えに対して、福音のなかで罪の赦し、信仰、聖霊の助けについていわれている部分を付加しなければなりません。このように他の場所で新しい服従についての教えは豊富に語られています。すべてのことがらはこの創世記のここに集められていますので、この短い言説を目立たせるのです。罪の支配というこの言葉については、十分に注意を促しました。他の場所でも無知や無視に捕えられることが死に至る罪であることが豊富に語られています。来るべき解放者についての約束が初めから宣言されてすぐに、その記憶はすべての氏族を保護すべきです。その後これは氏族のあいだで、しばしば後世に伝えられなければなりません。次いで福音が多くの明瞭な証言によって地上のすべての場所にばらまかれました。そして、天からの声が鳴り響きました。「これに聞け」<sup>(50)</sup>。したがって、福音を知らないことでだれも容赦されないのです。それどころか、この無知の罪を聖霊はとりわけ非難しています。キリストがこういうように。「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」<sup>(51)</sup>である、と。

## 注

- (1) 『プルターク英雄伝(9)』より「アレキサンドロス 52」(河野与一訳、岩波文庫、1956年、75頁以下)。
- (2) ヨハネによる福音書、16:8-11。
- (3) ヨハネによる福音書、16:8。
- (4) ヨハネによる福音書、16:10。
- (5) ルカによる福音書、24:47。
- (6) ガラテヤの信徒への手紙、3:10。
- (7) ローマの信徒への手紙、1:18。
- (8) ローマの信徒への手紙、7:13。
- (9) エフェソの信徒への手紙、4:24。
- (10) ローマの信徒への手紙、5:12。
- (11) ローマの信徒への手紙、3:23。
- (12) ローマの信徒への手紙、7:23。
- (13) ローマの信徒への手紙、8:7。
- (14) エフェソの信徒への手紙、2:3。

- (15) ヨハネによる福音書, 3:5。
- (16) 詩編, 51:7。
- (17) 創世記, 8:21。
- (18) 詩編, 25:7。
- (19) エレミヤ書, 17:9。
- (20) 創世記, 3:15。
- (21) ローマの信徒への手紙, 8:7。
- (22) エレミヤ書, 17:9。
- (23) 詩編, 31:23。
- (24) ルカによる福音書, 10:34 以下。
- (25) エフェソの信徒への手紙, 2:3。
- (26) 創世記, 3:15。
- (27) ルカによる福音書, 10:30ff
- (28) 申命記, 6:5。
- (29) レビ記, 19:18。
- (30) マルコによる福音書, 3:5。
- (31) マタイによる福音書, 26:38。
- (32) ヨハネによる福音書, 3:16。
- (33) ヨハネの手紙一, 4:16。
- (34) テトスへの手紙, 3:4。
- (35) ヨハネの手紙一, 1:8。
- (36) 詩編, 32:1。
- (37) ローマの信徒への手紙, 7:23。
- (38) エレミヤ書, 17:9。
- (39) ヨハネによる福音書, 3:36。
- (40) ローマの信徒への手紙, 5:18。
- (41) 申命記, 9:20。
- (42) ヨハネの手紙一, 3:7f
- (43) エフェソの信徒への手紙, 5:6。
- (44) ローマの信徒への手紙, 8:13。
- (45) ローマの信徒への手紙, 6:12。
- (46) 詩編, 119:133。
- (47) 創世記, 4:7。
- (48) 創世記, 3:15。
- (49) ヨハネの手紙一, 3:8。
- (50) マルコによる福音書, 9:7。
- (51) ヨハネによる福音書, 16:8-9。